

■パネルディスカッション

「ともに守ろう！ともに活かそう！国立公園再発見！」

パネリスト：

神田 優 氏（かんだ まさる）NPO 法人黒潮実感センター センター長

竹葉 秀三 氏（たけば しゅうぞう）竜串観光汽船代表／NPO 法人竜串観光振興会

田村 卓実 氏（たむら たくみ）

一般社団法人あしずり温泉協議会会長／足摺国際ホテル代表取締役

西尾 知照 氏（にしお ともてる）愛南町立中浦小学校教頭／自然公園指導員

吉村 博文 氏（よしむら ひろふみ）土佐清水市副市長

進行役：小林 誠（こばやし まこと）環境省土佐清水自然保护官事務所 自然保護官

MC：

それでは、「足摺宇和海国立公園指定 40 周年記念シンポジウム」を再開します。

これから行うパネルディスカッションは、「国立公園再発見！」というテーマで、パネリストの皆さんに、国立公園の課題や地域活性化、今後の方向性などについて熱く語り合っていただきます。

それでは、出演者の皆様をご紹介いたします。パネリスト、向かって左から、NPO 法人黒潮実感センター センター長 神田優様です。そしてお隣は、竜串観光汽船 代表 竹葉秀三様。続いて、一般社団法人あしずり温泉協議会 会長の田村卓実様です。そして、愛南町立中浦小学校 教頭 西尾知照様です。土佐清水市副市長の吉村博文です。以上の 5 名の皆さんです。そして、パネルディスカッションの進行役は、環境省土佐清水自然保护官事務所の小林誠さんです。それでは、小林さん、進行をお願いいたします。

小林：

皆さん、こんにちは。改めまして本日はシンポジウムにご来場いただきまして、ありがとうございます。ただいまご紹介いただきました、私は、足摺宇和海国立公園を担当している自然保护官、レンジャーの小林誠です。本日はこのパネルディスカッションの進行役をさせていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。今回のパネルディスカッションのテーマは、国立公園再発見ということで、皆様には、この足摺宇和海国立公園について、テーマ通り再発見してもらいたいと思います。そのために本日ご出席いただきましたパネリストの皆様には、次のことで熱く語り合っていただきたいと思います。まず国立公園の魅力、足摺宇和海国立公園にはどういった魅力があるのか。もちろん詳しい方もいらっしゃると思うが、皆さんでも知らなかった魅力をこのパネルディスカッションで改めて再発見できることを願っております。次に、この足摺宇和海で抱えている課題や問題点、指定から 40 年経った今、現場ではいったいどのような課題や問題点があつて、実際にそれについてどのように取り組んでいるかについて考えていただきたいと思います。そして最後に、これから足摺宇和海国立公園をどうやって盛り上げていけばいいのか、そのための対策や連携の仕方、体制、そういうものについて是非考えていきたいと思っております。本日は現場で活躍されている方々にパネリストとしてご出席いただいております。現場だからこそわかる生の声を、是非お楽しみください。

まず、私の方から足摺宇和海国立公園の全体について、簡単にご説明させていただきます。今スクリーンに映し出されたのが、足摺宇和海国立公園の区域図です。先ほどから皆様からご紹介いただいた通り、足摺宇和海国立公園は昭和 30 年に足摺国定公園に指定されてから、45 年に海中公園第 1 号に指定された後、今から 40 年前の



47年11月10日に見事、国立公園に昇格いたしました。陸域の面積はおよそ11,000ha、宇和島市、西予市、鬼北町、松野町、愛南町、四万十市、宿毛市、土佐清水市、大月町の5市4町にまたがる国立公園となっております。南部の足摺地域は豪壮な断崖が続く、どちらかというと男性的な海岸景観が続いております。西南部の宇和海側は、リアス式海岸や島嶼地域など、どちらかというと柔らかい女性的な雰囲気を醸し出している国立公園です。そこに内陸部の法華津岬、滑床、成川渓谷、篠山といった内陸部を含めた国立公園となっております。私からはこれくらい簡単にしておきまして、実際に魅力については、パネリストの皆さんからご紹介いただきたいと思います。

それでは最初に、パネリストの皆様から自己紹介をお願いしたいと思います。まず神田さん、よろしくお願ひいたします。

◆パネリスト自己紹介

神田氏：

皆さん、初めまして。NPO法人黒潮実感センターの神田と申します。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。簡単な自己紹介ということですので、さらっとお話しますと、私、出身は高知市桂浜のすぐそば、目の前が太平洋で生まれ育ちました。途中大阪にいたこともございましたが、高知が好きでたまらないという、非常に子どもの頃から海好き、釣り好き、潜り好きという、そういう野生児のような性格の人間で、高知に帰ってきました、魚の研究をしました。幼少時代からの生物学者になりたいという夢を一応実現しまして、魚類学者として研究をしております。

足摺宇和海国立公園にあります柏島との出会いとなりますと、大学1年生の頃、今から約26年前になりますが、大学で初めて柏島に潜りに来たときに、柏島の海を見た瞬間に衝撃を受けて、高知にこんな素晴らしい海があるんだということでファンになって、そこから柏島とのつきあいが始まりました。大学院の頃には、柏島、そして沖縄県の座間味島をフィールドにしまして、魚類の潜水調査をずっとしておりました。途中、滞留ガイドなどもやっておりまして、かれこれ水の中に7,000時間くらいは入っているような、半分エラができかけたような人間ですけれども、そういった魚の目線から柏島、あるいはこの国立公園を見たいということで、1998年に柏島に黒潮実感センター、海のフィールドミュージアムをつくろうということで単身乗り込んできまして、2002年にNPO法人化して、ちょうど去年、法人化10周年を迎えるといったところになっております。海の魅力については、また後でじっくりお話したいと思いますが、柏島に持続可能な里海をつくろうということで活動しております。どうぞよろしくお願ひします。

竹葉氏：

皆さん、こんにちは。竜串観光汽船の竹葉です。竜串でグラスボートをやっておりまして、そのなかで、県内外から竜串に来ていただくお客様に竜串の海岸、見残し海岸、竜串の魅力を紹介しております。そんな中で、西南豪雨という大きな災害が起きて、海の中が大きく変わってしまいました。自然再生を進めていく上で、いろんな、それまで知らなかった海のことを少しづつ勉強していく上で、地元の小学生なんかと一緒に、サンゴのこと、魚のこと、森と海のつながりが大切ですよということを、一緒に勉強しながら、遊びながらやっております。よろしくお願ひいたします。

田村氏：

皆さん、こんにちは。あしずり温泉協議会会長の田村でございます。今、足摺国際ホテルの代表取締役も務めております。今の会社は、平成2年に入社いたしまして、平成20年に現職の代表取締役に就任しております。あしずり温泉協議会と、非常に堅苦しい名前ですけれども、これは足摺温泉組合という組織が前身にあります。

た。それまでは足摺テルメさんの温浴施設のみが、温泉をひいて営業をしておりましたが、平成11年に他、9軒の旅館、ホテル、民宿に配湯をしていただきまして、その際に足摺温泉組合という組織を立ち上げました。昨年の2011年に一般社団法人を取得いたしまして、その際に、あしずり温泉協議会という形で、さらに今まで以上に活発な事業展開をしていこうということで立ち上げた組織です。その初代の会長に就任させていただいており、現在に至っております。その他にも各大手旅行会社の協力会に高知県支部がありますが、そういった支部の支部長もしくは副支部長等々も務めさせていただいております。立場上、国立公園の保全とか保護とかいうことは全くわかりませんので、活用のことのみで、本日はお話をさせていただきたいと思いますけれども、よろしくお願ひいたします。

西尾氏：

皆さん、こんにちは。愛南町からやってきました西尾知照です。愛媛県からやってきたパネリストは私1人みたいですので、他の4人に負けないようにがんばりたいと思います。私は愛媛県の伊予市中山町というところで生まれました。名前通り山の中で生まれ育ったわけですけれども、山の中で育った私が、初めて足摺宇和海海中公園を訪れたのが、幼稚園のときでした。そのとき初めてグラスボートから覗いた窓の外の景色、まさに竜宮城のような感じで、今でもはっきり覚えております。それが原因か、どんどん海や魚に夢中になっていく私を見て、私の両親は「あれがいけなかった」というようなことをよくいっておりました。大学時代、スキーパーダイビングにはまりまして、それからますます拍車がかかって、宇和海に通うようになります。大学時代はヤドカリや魚を調べておりました。勉強というよりは、趣味の世界で勝負をしていたんですけども、そのスタンスは現在でも変わらないかもしれません。現在は仕事上、愛南町に単身赴任をしており、土日休みになつたら愛する家族のもとへ帰るべきなのかもしれません、なんだかんだと理由をつけて海に潜っております。そのおかげで、こうして今日、皆さんにお会いできたのかもしれません。現在、宇和海の方でもサンゴが減っておりますので、それをなんとかしたいということで、今日、愛南町からも清水町長さん来られており、行政の支援を受けて仲間たちと一緒に「愛南サンゴを守る会」というのを立ち上げました。今日もその仲間たちといっしょにやってきました。今日はよろしくお願ひします。

吉村氏：

皆さん、こんにちは。土佐清水市副市長の吉村でございます。私、昭和48年に臨時職から今日まで、約40年近く務めております。その間、観光産業にも幾分携わりをもちながら、平成21年の7月に副市長を拝命し、今日に至っております。私の出身につきましては、竜串海中公園の近くにあります集落の出身でございまして、目の前は壮大な太平洋の中で、小さいときから毎日海の中に潜って魚を捕ったりという生活で、自然というものは当たり前にあるという認識もてきておりましたし、山や海、川も幾分その時分からいくと乱れてきたかなと思っておりますし、私が奉職した時代は、竜串の船のところに長い行列ができるおったという思いもしておりますが、大変観光客も減少しております。行政としてどのような形で自然を守りながら、町づくり、あるいは皆さんの健康、あるいは生活を守っていくかということを、皆さんと共に認識をもちながら今日は考えていただきたいと思いますので、よろしくお願ひします。

小林氏：

皆さん、ありがとうございました。それでは早速議題の方に入っていきたいと思います。まずは国立公園の魅力について、いったいどんな魅力があるのか、それぞれ紹介していただきたいと思います。最初に竹葉さん、よろしくお願ひいたします。

◆国立公園の魅力

竹葉氏：

これは皆さんご存じの竜串の上空の写真ですけども、私がやっているのは、2号地と書いてあるところですね。竜串の港から3号地、4号地、この湾内でグラスボートによって海底の紹介をする仕事をやっています。

これはグラスボート、こういう船ですね。これは地元の小学生を乗せたときの様子です。こうやって海底を覗いています。



これは海中展望船といいまして、客室が水面下にあって、横位置から見るようになっています。

これは見残し湾にあるシコロサンゴというサンゴなんですが、一つの塊としては日本で一番大きいそうです。こうやってサンゴが大きく育っていると、棲み着くいろんな生き物が増えますので、サンゴが大きく育つというのは、とてもいいことですね。



これは見残し海岸です。海底を見た後に、一度船から上がりまして、こういった蜂の巣状に穴が開いた海岸を一周、小一時間くらいありますが、回ることができます。

これはこうやって大きく穴が開いていますが、見残しの石というのは、砂岩でできており、非常に柔らかいです。それで波による浸食、陸に出ている部分でしたら、雨、風による浸食を受けて穴が開いていくのが特徴ですね。



小林氏：

ありがとうございました。ご紹介いただいたように竜串は、日本で最初の海中公園地区（現：海域公園地区）に指定された場所です。美しいサンゴや、奇岩で有名な見残しなどたくさんの魅力がある事を分かっていただけたかなと思います。竹葉さんは、竜串で観光汽船の船長をされておりますので、先ほどの基調講演でお話があつた通り、ガイドという点でも、かなりおもしろい話をさせていただけますので、是非皆さん、竜串の方にも足を運んでいただければと思っております。

続きまして、宇和海の海がどうなっているか気になりますので、西尾さんに宇和海のご紹介いただけたらと

思います。

西尾氏：

宇和海の魅力、たくさんありますが、3つに絞ってご紹介したいと思います。まず1つめが、多くのサンゴとカラフルな熱帯魚があるということで、宇和海らしい風景をまず見ていただきます。

赤いオオトゲトサカ、これもサンゴの仲間です。それと今見えているのがテーブルサンゴですね。これが立体的になっているというのが、宇和海の大きな特徴で、よく箱庭のようだとか、竜宮城のようだとかという形容詞があります。今これ、ダイバーが向こうからやってきたところですが、こういう風景を写真に撮ったりしながら楽しむダイバーが多い
アカバエ ようです。場所は、赤瀬というところです。



2つめが狭い場所で多様な風景が見られるということです。横島という島をご紹介したらと思いますが、こういうふうに一面海底にテーブルサンゴが生えております。その間に色とりどりのカラフルな熱帯魚が泳いでおり、青い魚はソラスズメダイという魚です。ここは数年前に台風で大きなダメージを受けたところですが、現在このようになんとか回復をしてきています。水深が浅いですので、長時間潜っていても楽しめますし、太陽の光が射してきてとてもきれいな場所です。そしてすぐここから20mくらいの深さに潜っていくと、海底の風景が一変します。海藻みたいなのが生えていると思うますが、すべてサンゴの仲間です。とてもたくさんの種類の、ソフトコーラルというサンゴが生えています。海底から鞭のようにびょこびょこ長いのが生えているのが、ムチアゲというサンゴの仲間です。撮影していると、途中ウツボが出てきて私もびっくりしたのですが、ウツボもびっくりしたのかもしれません。

3つめが生物の多様性に富んでいる、つまり生物が多いということです。今日の配付資料の一番最後に、生物多様性ということが出ておりますので、興味のある方、見ていただいたらと思います。最近、よく生物多様性という言葉を聞きますが、宇和海も、魚や生き物が多い場所です。それをちょっとスライドで紹介できたらと思います。

さきほど紹介した赤いサンゴのオオトゲトサカの中に、テンクロケボリガイという貝がいます。保護色になってわかりにくいけれど、1cmくらいの小さな貝です。こういうのを探していると、だんだんと海の魅力にはまってしまいます。



これは先ほどのムチアゲというところについているガラスハゼのペアです。不思議とメスの方が大きく、広い海の中で、1本のムチアゲに2匹のペアでだいたい棲んでいます。どうやってこの2匹が出会うのか、不思議です。

これはカンザシヤドカリというヤドカリですが、鞭のような触角でプランクトンを食べながら生活しています。これも一つの穴に1匹しか棲んでいないので、オスとメスがどうやって出会うのか、これもなかなか考えると不思議です。

これはアカオビハナダイという魚ですが、帶が非常にきれいで、これはオスです。婚姻色になっていて、たくさんのメスをハーレムに従えている、男性にとっては羨ましい魚ですね。水深20m以上の深いところに棲んでいるので、潜水病が怖くて、なかなか粘って写真を撮ることができません。

ハゼとエビの共生ですが、エビが穴を掘って、ハゼがその穴の中に棲んで、ハゼが見張り役をしています。エビが穴の外に出るときは、触角をハゼの身体にくっつけて、ハゼが逃げるとすぐに、エビが逃げるような体

勢をとっています。このように、生き物が大変豊富な海です。ロビーにもたくさんの生き物の写真を展示していますので、ご覧になってみてください。



小林氏：

ありがとうございました。実際に映像で海の中見ることは、なかなかない機会ですので、さながら海の中をダイビングしているような気分になれたかと思います。皆さん、ダイビングされた方も、されたことがない方もいらっしゃると思うので、今年の夏あたり、ダイビングに挑戦してみて、実際にご自身の目で海の中を見ると、さらに足摺宇和海の魅力を感じてもらえるのかなと思っております。続きまして、田村さん、今度は足摺岬についてご紹介をお願いします。

田村氏：

まず足摺岬といいますと、270度見渡せる展望台からの景観ですね。観光地で270度水平線が見渡せる場所というのは、本当に日本でも限られた場所しかありません。実際にそこに立っていただくと、本当に地球が丸いというのを実感していただける場所です。海だけでなく、山の緑も非常に美しい場所です。

人工的な建造物ですが、灯台です。足摺岬の灯台は11月1日が灯台の日に制定されまして、平成10年、これがちょうど50回目の灯台の日でしたので、これを記念して海上保安庁さんが、日本の灯台50選というコンクールをしました。そのなかで当時、日本の中で灯台大小合わせまして、3,348基のなかの50選に選ばれています。それはやはりこの灯台の白と海と空の青と、山の緑、このコントラストが大変美しいということで選ばれたと思っています。ですから、この景観は、日本国内にとどまらず、世界レベルで評価されています。というのは、ミシュラン、よくお聞きになると思いますが、通常はレストランとかホテルの三ツ星とか二ツ星とか有名ですが、これの観光地のミシュラングリーンガイドブックというのがあります。この評価の中で二ツ星を2ついただいています。二ツ星を2つというのは、足摺岬というエリアと足摺岬からの眺望と2ついただいていますので、二ツ星を2つあわせて四ツ星で、三ツ星を超えたというふうに勝手に自負しております、それだけ評価を高くいただいている場所です。

いわゆる知れた、足摺岬といえばツバキですが、足摺岬の半島で15万本、岬周辺だけでも5万本、ヤブツバキが自生しているといわれています。

ツバキだけではなくして、亜熱帯エリアの珍しい動植物が自生している地域ですね。

牧野富太郎博士が発見されたアシズリノジギクとか、他にも珍しい亜熱帯植物がたくさん自生しておりますし、昆虫も、足摺にしかいないトンボがいるとか、そういう特別な地域になっているところです。

白山洞門ですね、これは日本一の大きさです。17m、16mの穴が開いており、花崗岩でできている海食洞門



としては日本一の大きさです。県の天然記念物にも指定されており、そういった場所が足摺エリアには点在しております。これはいずれも 40 年前に国立公園に指定いただいたおかげで、この 40 年間こういった環境が保全されてきているということで、感謝しているところでございます。



小林氏：

足摺岬というと、展望台に行って灯台を見て帰ってしまう方も多いと思いますが、先ほどご紹介された亜熱帯植物や白山洞門など他にもたくさん見所があります。お話にもありましたように足摺岬付近は特別保護区といって、国立公園の中でも一番自然が豊かな場所というエリアに指定されています。是非そういうところも見ていただければなと思います。では、次に神田さん、大月や宿毛のあたりの状況についてご説明をお願いします。

神田氏：

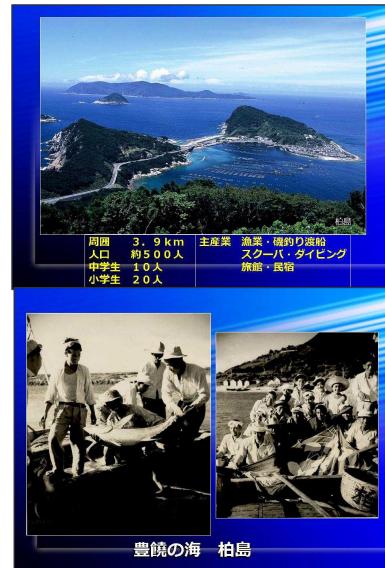
私たちが生活している柏島、ここにありますけれども、柏島というは大月町にありまして、柏島の少し左側に見えているのが蒲葵島^{ビロウトウ}という無人島で、一番左側に見えているの

が幸島です。さらに沖に見えています大きな島が沖の島で、その向こうに姫島、あっちの方に鵜来島が見えます。黒潮の影響を非常に強く受ける沖の島、柏島、こういったところが、非常に魅力があります。ただ単に海がきれいだということだけではなく、先ほどのお話にもありましたように生物多様性という面から見ても、非常に素晴らしいところがあります。

その前に、これは柏島の昔の漁の写真ですが、全国各地で低地網、大敷網というのをやっていると思いますが、柏島、先ほどもいいましたように湾内に、実は数十年前にキハダマグロが捕れていた、しかも人が住んでいるすぐ目の前の海に、このような1mを超えるような大きなマグロがどんどん回ってきていて、一番多いときには一網に2,400本入ったというような豊穣の海でもあります。

先ほどのお話にもありましたが、一方で非常に多様性が高いのが柏島、沖の島のエリアです。沖の島は宿毛市のエリアになっており、私が魚の研究者として昔から潜っているなかで、柏島、沖の島は、非常に魚の種類が多いといわれてきたんですが、では具体的にどれくらいいるんだろうかということを、高知大の研究者等々と30年間にわたって研究してきた結果、今現在では1,000種類を超える魚類相が発見されてきております。1,000種類という数字が、実は国内の、たとえば、沖縄とか小笠原とか熱帯域のリストを見ましても、それをしのぎまして、日本で最も多いという数字になっています。通常、生物多様性が高いというと、熱帯や亜熱帯域の方が高くて、北の方に行けば多様性は低くなるといわれているわけですが、温帯域にある柏島が、なんと日本で最も魚の種類が今のところ多いというところが、おもしろい魅力でもあります。その理由として、南方から流れてきます暖流黒潮の影響、そして豊後水道といったところの温帶の富栄養な海水が入り交じるところに柏島が位置するということで、多様な生き物が生息しているのではないかと考えております。ここにはサンゴも写っていますし、海藻類もあります。非常に多様な水中景観があるところです。

これはさまざまな魚がいるという事例ですが、柏島で発見されましたキツネメネジリンボウとか、和名がついていないジョーフィッシュといわれている魚など、さまざまな魚がいます。こういった、これまででしたらダイビングをしなかったら見られなかった魚が、ダイビングが普及してきたことによって、多くのダイバーの目に触れる事によって、さまざまな新種であるとか日本初記録種といったものが、どんどん見つかってくる。こういった生き物が生息しているのを見に来るということで、柏島、沖の島は、ダイビングのメッカとなり、世界各国からもダイバーが来ます。もちろんメッカは沖縄の方ですが、柏島には珍しい魚がごろごろいると。沖縄だと、水深30m、40mまで行って、これ、すごいだろうと見せていく生き物が、柏島ですと、10数m、20mまでのところにごろごろおり、沖縄の方が悔し紛れに「柏島は魚の価値を下げる海だ」という捨て台詞をいって帰っていったというエピソードもあります。どういうわけで、ここにこれだけ魚がいるのかということを研究するのが、私たちの仕事でもあります。



黒潮実感センターは、柏島を島全体を丸ごとミュージアム、一つの博物館ととらえることで、そこにある自然環境や人々の暮らしも含めて博物館と考え、将来にわたって持続可能な里海をつくっていこうという取り組みを進めています。

この里海という言葉ですが、国立公園と里海が直接リンクするかどうかはわかりませんが、先ほどのお話にもありましたように、日本というのは非常に人口密度が高く、豊かな自然はあるけれども、そこは特別な地ではなくて、そこは人と自然が共存している、そういう場所です。ですから、人の手が入っていないようなところは、ほとんどないに等しい。すると人と海がいい関係をつないでいる海を里海と定義しました。その定義の中で、私は、人が海からの豊かな恵みを一方的に享受するだけではなくて、人も海を耕し育み守る、人と海が共存できるような海、それを里海というふうに捉えております。こういった考え方は、今後、国立公園という、先ほどのお話のなかにもありましたが、マッチしていくのではないかと考えております。



小林氏：

ありがとうございました。柏島、沖の島付近が、日本一魚の種類が多いというのは驚きますね。サンゴや熱帯魚などを考えますと、沖縄の方に目がいきがちですが、沖縄の人が羨ましがるような、実はこんな身近に素晴らしい自然が残っています。こういった自然があることも、足摺宇和海国立公園の大きな魅力であり、知らない人も多いと思いますので、どんどん広めていこうと思います。一方で里海という、大切な考え方、そういったことも魅力の一つとして考えていく必要があると思います。

続きまして、吉村副市長からお話を伺いたいと思います。国立公園は足摺の場合、地元の熱い要望もあって、40年前に見事国立公園に昇格したわけですが、地元自治体、土佐清水市にとっての国立公園の存在、国立公園の魅力はどういったものがあるか、お考えをお聞かせいただけませんか。

吉村氏：

具体的な海の中とか景観とかにつきましては、4名の方がスライドを使って説明されたわけです。私はスライドを割愛させていただいて、魅力ある海中、景観ということをお話したいと思います。ご承知の通り、四国の西南地域に属しております、雨も多く、気温も暖かく、18度から19度くらいということで、環境的には過ごしやすい状況にあると思いますし、長い、130kmくらいの海岸線の中に、先ほどご紹介のありました、素晴らしい海中の景観、また陸上の景観というのが大きな魅力でありますし、ひがみではありませんが、高速もありませんし、高いビルもございません、鉄道もございません。逆にそのことが、自然にとって大変素晴らしい環境だったかなと思っておりますし、自然の中で、自然のリズムの中で生活ができるということが、大きな魅力もありますし、目の前に見える太平洋の中で、足摺の沖は好漁場ということをございまして、ご承知の通り、大変おいしい清水サバ、あるいは昔から伝えている鰯節ということで、海の幸も大変多いというところが魅力ではないかなと。またあわせて、そこに住む皆様方が、熱い人情味のある方ばかりだと思っています。そういうところが魅力ではないかと思っています。

小林氏：

私は高知には仕事で初めて来ましたが、サバが生で食べたのは初めてで、そのおいしさに驚きましたし、地元の皆さんのが優しさや、暖かさにもすごく感動しております。こういった豊かな自然があるからこそ豊かな文化や人柄があるのかなと感じています。どうもありがとうございます。

足摺宇和海国立公園の魅力はまだまだ他にもたくさんありますので、私からも簡単にご紹介させていただきたいと思います。

こちらは法華津峠です。足摺宇和海国立公園の中では一番北側に位置しております。ご覧の通り法華津湾を見下ろすには素晴らしい絶景の場所です。

そしてなんといっても素晴らしいのは、夕日です。日本の原風景というか、郷愁を駆られるような、そういった美しい景観が残っているような場所です。是非足を運んでいただければと思います。

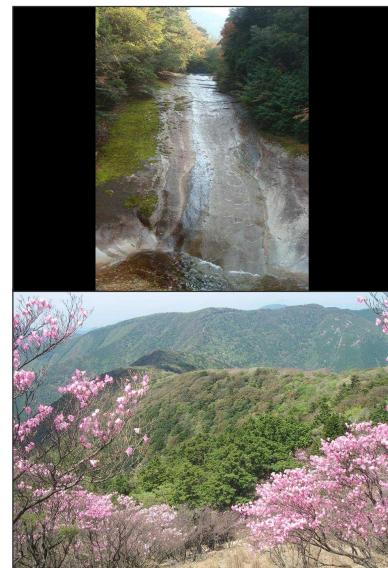
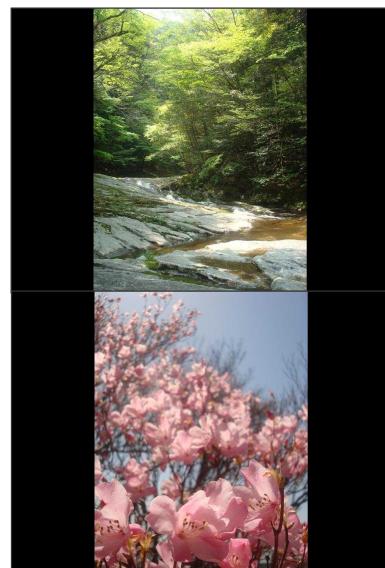
足摺宇和海国立公園は海側が多いですが、実は、滑床渓谷、成川渓谷といった、山の国立公園の部分もあります。

大きな滝もあって、滑床渓谷、成川渓谷は渓谷散策とか登山、キャンプとかアウトドアとしても魅力ある場所だなと感じております。最近では、キャニオニングという、滝を滑ったり、渓谷を人がそのまま流れしていくような、もちろん安全ですけれども、そういう新しい体験も始まっているので、ますます魅力の幅が広がってきたのかなと感じます。

今度はピンク色の美しい花、アケボノツツジです。こちらは篠山とい

う山の山頂に咲いている花です。

このアケボノツツジは春になると一斉に開花して、登山者の心を和ませてくれます。駐車場から1時間くらいで登れます。初心者の方でも登れるのかなと思いますので、是非今年のゴールデンウィークは篠山に行くということで、皆さんのゴールデンウィークの計画は決まったと思います。是非、篠山も訪れてみればいかがでしょうか。



◆国立公園の課題と活性化

小林氏：

ここまでが足摺宇和海国立公園の魅力です。続きまして、皆様には、今年で指定40周年を迎える足摺宇和海国立公園が抱えている問題や課題について、またそのために行っている対策についてご意見を伺っていきたいと思います。

まずは西尾さんにお聞きしたいと思います。西尾さんは長年宇和海の海を見続けたわけですが、この豊かな海で現在、感じておられる課題や問題点、またそのための取り組みについて是非ご紹介をお願いします。

西尾氏：

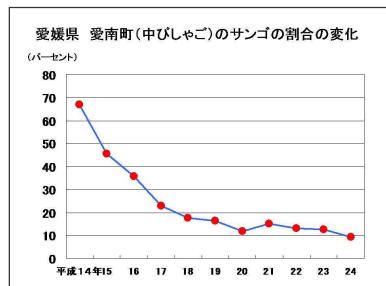
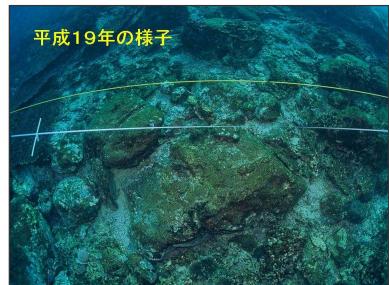
まず2つ、サンゴが減っているということと、地元の人が宇和海の素晴らしさを知らないことがあると思います。11年ほど前からサンゴの調査をしていますが、これは平成14年度の鹿島のサンゴの様子です。びっしりとサンゴの生えているのがわかると思いますが、これが5年後には、これは全く同じ場所で、全く同じ角度から撮影しておりますが、全くサンゴがなくなってしまっている状況です。

これをグラフにしていきますと、平成14年度は70%近くありました。この場所の面積の70%がサンゴだと思ってもらったら結構です。それが年を追うごとに減っていってしまって、去年の調査ではとうとう10%を割ってしまいました。こうなると、本当にところどころにサンゴがあるというような状況です。ここも先ほど紹介した横島のように回復してくれる可能性も残っていますので、我々はこのグラフが右上がりになることを祈っています。

地元の人が宇和海の素晴らしさを知らないということで、私は教員をしておりまますので、地元の子どもたち、また自校の子どもたちに生き物教室を開いて、生き物について紹介しております。これは近隣の学校に呼ばれて行ったんですが、時計も読めないような1年生に説明するのはなかなか大変ですが、実際にサンゴを見せたり貝を見せたりすると、子どもたちは飛びついて目を輝かせて見ててくれています。

愛南町の広報誌では、一角をお借りして、私の撮った写真で生き物を紹介しています。たとえば今年の1月号では、今年は蛇年ということで、なににウミヘビと書いた名前のついた、これアナゴの仲間ですけれども、ウミヘビがたくさん棲んでおりますので、こういうものを紹介して、皆さんにすばらしさを伝えております。

対策と活性化ですが、サンゴが減っているということで、「愛南サンゴを守る会」を設立したんですが、駆除しているところの様子を見てもらったらと思います。



今、手で取ろうとしているところに貝がたくさんついています。サンゴが白くなっているのは食べられて死んでいるところです。右の茶色いところはまだ生きているんですけども、その境目にヒメシロレイシガイダマシとか、サンゴを食べる貝がたくさん棲んでいます。も非常にたくさんの貝がサンゴを食べています。ここも非常にサンゴが一面を覆って美しい場所でしたが、現在はこのようにサンゴが少なくなっています。



もう一つが、オニヒトデです。オニヒトデに近づいているところですが、やはりオニヒトデが食べたところは、サンゴが死んで白くなっています。左側はサンゴが生きているところですが、大きくなると 50cm、60cm 近くもあって、毒をもっているヒトデですので、捕るときも注意が必要です。このようにして駆除をしていますが、食べられた後は真っ白になってしまっています。

最後、これが逆転満塁ホームランになるかもしれないという、シーウォーカーです。去年、「いやし博」ということで単発的に行われたものですが、1,400 人ほどの集客がありました。ダイビングができない方でも簡単に潜れてサンゴなどの海中景観を楽しめるという、とても画期的なものです。今年からは民間の方でこれをやろうと計画をしていますが、行政の支援も必要になってくると思いますので、よろしくお願ひします。



もう一つは、若い人が参入してくれたらと思います。この会場にも来ている角田君は「愛南マリンサービス」というのを立ち上げまして、先ほど見ていただいているシーウォーカーとかダイビングの方をやってくれています。皆さん激励の意味を込めて拍手をしてあげてください。愛南町、宇和海のガイドは彼に任せて、これで私の話を終わりたいと思います。

小林氏：

ありがとうございました。オニヒトデや貝などサンゴを食べる生き物は、存在自体が悪いわけではありません。しかし、我々人間や生物多様性にとってどうしてもサンゴの方が、価値が高い。サンゴを守るために、サンゴを食害してしまう生物を駆除するという管理も必要だということを考えることができました。また子どもたちへの教育や普及啓発についても 1 つの課題で、先生が行っている地道な努力というのが、きっと必要になってくるのですね。それからダイビングは難しいな、できないなって方が大勢いると思うが、そういうときにシーウォーカーという新しい海の中を散歩できる方法もあることは魅力的ですね。こういったのも 1 つの地域活性化の方策、足摺宇和海の利用の方策という点でも、いい点だと思います。

続きまして竹葉さんにお聞きしたいと思います。竹葉さんは長年、おらんぐの海ということで、竜串を見続けているわけですが、竜串の海域環境の変化とか、問題、課題、そのために行っている対策などについて是非ご紹介をお願いしたいと思います。

竹葉氏：

今、西尾さんも、オニヒトデの駆除とか貝駆除について紹介されました。竜串の海でもサンゴが増えてくるとともに、それを食べる貝類とかやオニヒトデが増えています。特にオニヒトデが増えてきて、捕っても、捕っても、外部の海域から入ってくる、まさにいたちごっこです。地元に竜串観光振興会という組織があり、その中で潜ることができるダイバーを集めて駆除を 2000 年くらいから始めています。1970 年に海中公園になったわけですが、その当初からオニヒトデはおりました。



地元の漁業振興会などのグループの皆さんのがずっと駆除をやってこられたわけですが、それに引き続いてやり

始めたのがきっかけです。この写真はオニヒトデを駆除している写真で、先ほど紹介されていたように、非常に強い毒をもっていまして、なかなか危ないんですね。実際、去年の春先でしたか、沖縄の女性インストラクターが誤って手に刺して亡くなっています。蜂なんかの毒と一緒に、アナフィラキシーというショック性の症状で亡くなったわけですが、なかなか危ないです。

これはさっさと一緒に、網袋に回収しながら駆除をしているわけですが、この袋いっぱいになると重く、これを抱えながら泳ぐと、そういうときに足を指されてしまったりする。なかなか体力が要るわけですね。そういうのをもっと他に方法があるんじゃないかということで、黒潮生物研究所がお酢でオニヒトデをやつける方法を開発しました、それもやりました。でも万遍なく身体に注射できないと部分的に生き残る部分があるんですね。2回目に行ったときにそういうのが動いているのを見て、ちょっと気持ちが悪いねということから、現在もやはり持ち帰って処分する方法を続けています。



これは非常にオニヒトデが増えてきたときですね。一回一回、一つずつ網を持って浮上するわけにもいきませんので、こうやって網を集めておいて、後から船にあげるという方法をとっています。

この写真は捕ってきたオニヒトデを、どの海域で何匹捕ったという計測をしている様子です。オニヒトデは1年に直径10cmくらい成長するといわれています。30cmだったら3年ものということですが、そういうのを計測することによって、何年ものがどの海域に入ってきてているというのが、わかるわけです。12年間の駆除数を書いていますが、24年の場合は12月までの数です。去年、一昨年からみたら、数が減ってきていましたので、発生のピークが下り坂になったのかなと甘い期待はしていますが、はっきりはわかりません。2号地から4号地と書いてあるのは、最初に紹介しました地図にあった海中公園の海域で、22年度136匹、23年度240匹、24年度66匹駆除しています。これは継続していくないと、竜串湾内のサンゴを守ることはできないということがわかると思います。駆除は人の目で見るものですから、サンゴの裏側におったら気がつかない。同じところに、この前捕ったのにまたいる、という状況があって、なかなか全部を捕ってしまうことが難しいというのが、厄介なところです。



平成12年度	104
平成13年度	110
平成14年度	222
平成15年度	332
平成16年度	2204
平成17年度	912
平成18年度	1028
平成19年度	895
平成20年度	987
平成21年度	1690
平成22年度	5173
平成23年度	4762
平成24年度	1258
合計	19677
	442

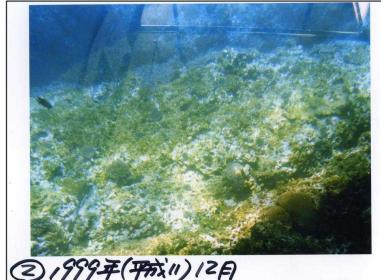
以前の真珠養殖やってたときに、筏からちぎれて落ちたのがまだまだあります、波が立つと埋まっているのが上がって来て、漂いながらサンゴに絡んでしまう。これをそのままにしておくとサンゴがまた死んでしまいますので、こういうのも海底清掃をやっております。

竜串の3号地でサンゴがどうなっていったかを記録している写真ですが、1984年、昭和59年に写したもので。この頃に、私が初めて水中カメラを買いました、それから写し始めたので、これから記録しないんです。70年頃の写真は、私の手元にはありません。こうやってサンゴもいっぱいありました。海中公園になってから14年後の写真



です。

これが 1999 年（平成 11 年）には、こんなにサンゴがなくなっています。さきほどの写真とほぼ同じところです。台風で割れてしまったものもありますし、また台風なんかのときの土砂の流入で死んでしまったサンゴ、家庭の排水だとかいろんな条件があったと思いますが、海に強いストレスがかかって、サンゴが衰退していったわけですね。海の状態が良ければ、台風なんかで割れた後でもサンゴは復活します。でもこのときは復活しませんでした。



これは 12 年の写真です。観光客のピークを過ぎてお客様も減り始めたのはサンゴがなくなったのも一つの原因じゃないのかということで、このままではいかん、なんとかサンゴを復活させたいと地元で取り組んだのが、串観光振興会です。取り組んだのが、移植活動です。海域公園外の元気なサンゴをとってきて、水中ボンドでくっつけるという方法でやっていました。白く写っているのが水中ボンドです。



1 年経って、サンゴがついてやっと育ち始めた矢先起きたのが、高知西南豪雨です。海の状態がさらに悪くなってしまって、もう半年間はこの海域は大変濁った状態で、グラスボートでもサンゴを見ることができませんでした。

これは移植したサンゴが、角がとれて丸くサンゴの形になってきたのがわかると思います。これが 15 年ですね。

平成 20 年、これだけサンゴが育ってきています。岩の白い部分が隠れてきていますから、サンゴが育ってきたのがわかると思います。



これは、平成 22 年の白化現象です。育ってきたサンゴが、この年は、台風が来なくて海水温度が上がってしました。このときこの海域で約 30°C くらいありました。サンゴがこういう白化現象を起こして、12 月くらいにはほぼ回復しましたが、このときに 1 割くらいが死んでしまいました。

これは去年、ちょうど 1 年前の写真です。なんとか地元でも、海中公園になった当初のサンゴに戻したいという思いで取り組んできて、12、3 年でやっと帰ってきたかなとは思っていますが、龍串の湾内でこの周辺しか、サンゴが残っていないわけですね。それを目指してどんどんオニヒトデが入ってきていますので、継続して駆除しなければいけないような状況です。



小林氏 :

ありがとうございました。竜串の海は今ご紹介いただいた通り、だんだんサンゴの衰退が目立ち始めて、2001年の西南豪雨で一気に死滅してしまったわけです。そこで竜串自然再生協議会を立ち上げ、様々な主体の人々が多く取り組みを行ってきました。サンゴの状態は良くなってきておりますが、取り組みはこれで終わりではなくて、これから進めていかなくてはいけないと感じております。ご来場の皆さんもご協力よろしくお願ひしたいと思います。

それでは次に田村さんにお聞きしたいと思います。田村さんは長年足摺岬でホテルの経営をなさっておられます、観光面で感じる課題や問題点、また取り組みについてご意見をお願いいたします。

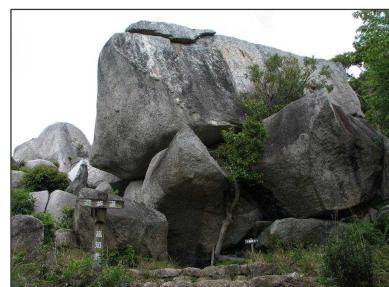
田村氏 :

土佐清水市では、観光客のピークが平成5年の104万人、このピークを境に、年々減少してきております。これはバブル経済の崩壊とか、リーマンショック以降、また東日本大震災、いろんな要因があると思いますが、旅行形態が昨今変わっているというのも原因にあると思います。足摺岬は遠隔地ということもありまして、これまでツアーチケットのお客様がほとんどでした。しかし、全国的に団体のツアーチケットから個人型に旅行形態がシフトしてきているということと、あわせて以前は景勝地を見て回る周遊型の旅行が主流でしたが、最近はウォーキングとか体験ものを絡めた旅行という形が増えてきております。それに対して、新しい素材はこの足摺岬和海エリアには豊富にありますので、それを活用した形で新しいものを発掘するとか、既存のものをブラッシュアップする形で取り組んでいこうとしております。

足摺岬展望台からの270度の素晴らしい景観があるというお話をさせていただきましたが、夜は星がすごくきれいに見えるんです。空気が澄んでいるということと、灯台の光しかないということと、270度の水平線が開けているということと、3つの条件が整っております、都会では到底見ることのできない星空が見える場所です。そこで7年前に、大手の旅行会社さんとタイアップしまして、スタートしました。それを足摺岬の全部の施設ができるように勉強会等々も行いながら、地域をあげて、これをPRしていこうと取り組んでおります。

唐人遺跡ですね、唐人駄場、唐人石等ありますが、これは世界のパワースポットにも入っているエリアです。これを市と県にお願いしまして、今整備を進めていただいているところでございます。あまり知られていないという場所なのでPRしようということで取り組んでいます。唐人駄場に関しては、今埋め立てて園地にしておりますが、世界一の規模のストーンサークルがあるところです。このパワースポット、唐人石に関しましても、非常にパワーがあるといいますか、専門の方から見るとそういうエリアということで、県外の方からも、なんで唐人駄場を売らないんだということを再三いわれております、そのあたりをPRしていくように取り組んでいるところです。

先程来、竹葉さんの方から竜串の説明はなされておりますが、今までのツアーでは、グラスボートに乗ってサンゴを見ながら見残し海岸に上陸して、時間の都合もあるので、周遊型の旅行が主流でしたから、10分、15分くらいで見残し海岸を周遊して、またグラスボートに乗って帰るというパターンが多かったんですが、それだけじゃなくて、この素



晴らしい見残し海岸をゆっくりガイド付きで見ていただこうということで、旅行会社に提案をして、今、商品化してくれています。室戸のジオパークに勝るとも劣らない奇岩があると思いますので、そのあたりをお客様に散策して見ていただくということを、提案させていただいております。

足摺黒潮鍋と命名しておりますが、この足摺宇和海の大自然の中で育まれた新鮮な魚介類を使った鍋を、足摺温泉郷の各料理長に集まってもらいまして、共通のレシピを作りました。土佐清水は宗田節の70%のシェアを占めているエリアですから、宗田鰯の鰯節からだしをとりまして、清水の天日塩を使う、それから清水サバとかウツボとかヒオウギ貝を入れた一定のレシピを決めて、各宿で共通でご用意できるというものを作っております。そういった形でいろんな素材の発掘、あるいはブラッシュアップを考えながら、商品を提供していこうと取り組んでおります。先ほど桂川課長が、外国のお客様にとつて国立公園のブランド力はまだまだあるというお話をされたのですが、私たちの努力不足かもしれません、実感として、国立公園のステイタスが40年前と比べると低くなっているような感覚があります。管轄官庁は違いますけれども、観光庁さんもできておりで、観光庁さんともタイアップしながら、国立公園というブランドといいますか、ステイタスを国内の一般の方に向けて、世界遺産とまではいいませんが、それに近い状態にまでPRできる状態にしていただけたらありがたいなということで、お願いでございますけれども、小林さんの方にお話させていただきます。



小林氏：

ありがとうございました。時代によって観光スタイルが変化するということで、それに見合った観光サービスをいかに提供していくのかということが重要ですね。そのために素材の発掘とか、それをどう活かしていくかということについて、ご紹介いただきました。また国立公園のブランド、ステイタスの向上ということで、非常に重要なご指摘をいただきました。国立公園は全国で30カ所指定されておりますが、多くのお客様は国立公園という認識で訪れられている方は少ないかと。なんとなくそこが観光地だから訪れていて、「え、ここは国立公園だったの」って方も多いと思います。我々のPR不足もあると思いますので、我々としても国立公園を今以上に皆さんに知っていただき、ブランドの価値というのも上げていきたいと思っています。がんばらせていただきますので、皆さんのご協力も是非よろしくお願ひします。

続きまして、副市長にお聞きしたいと思います。指定40年が経ちまして、国立公園の区域内では、たとえば観光施設が老朽化したり、観光客が減少したりなど、さまざまな問題があるかと思いますが、そういったあたりについてどういったお考えがあるか、お聞かせいただけませんか。

吉村氏：

先ほどの基調講演の桂川課長のお話にもありました、国立公園とはなんぞやというようなものが市民のなかにも、私のなかにもございまして、これによって市民がどういう恩恵を受けているかという疑問が多々ありますかと思います。ただ、国立公園になるということは、当然自然を守る必要があるわけですから、国立公園に来ていただいて、楽しんで理解をしていただいて、ほんとに癒やされて、そういう理解のなかで、やっぱり国立公園だなというような重みがないと、なかなか国立公園で、というような形のものはできにくいかなと思っております。それと先ほど、海の分野についてはスライドを見ながらいろいろ教えていただきました。ただ、人口の減少の中で、ある程度、人口の増加がないと、なかなか国立公園といつても、市民の所得についても、受け入れる、受けにくいという想いがあります。私は行政サイドのなかから、海中公園あるいは国立公園を含めたなかの観光振興をどのような形で図って、交流人口を増やしていくかということが、大きな行政サイドの課題というふうに思っております。5点ほど今後取り組んでいかなければならないと思っております。

まず1点は、土佐清水市の2大観光地であります足摺と竜串がクローズアップをされているところですが、従来から比べると、足摺岬そのものはある一定の活気があるかと思いますけれども、竜串地区が従来から比べて幾分衰退してきたと感じています。当然高齢化もありましょうし、経済動向の中で観光客の減少と、いろいろ課題があるなかで出てきた部分もありますが、竜串地区の観光力を強化していく必要があると思っておりまして、竜串地区につきましては、高知県の産業振興計画のなかにも位置づけをされておりまして、当然サンゴの保全とか環境教育とか、そういう形の強化も必要だと思っております。

それと近年、新興国が日本に旅行に来る。そういう進め方も必要だろうと思っております。ここを将来にわたって、どう受け入れしていくかということが課題にもなっておりますし、平成20年には観光庁ができております。2030年には、2,500万人の観光客を呼び込むという大きな目標もありますので、その観光客に対応できる受け皿を作っていく必要があると思っております。

もう一つは、ジョン万次郎を観光資源として、全国発信したいと思っております。今、商工会議所、行政も含めて、万次郎の大河ドラマ作成に向けた取り組みをしておりますので、万次郎会との協力の中で観光の資源に結びつけていきたい。

それともう一点、広域観光の推進というのがございます。今まで各市町村単位で、観光もやってきたわけですけれども、これからは幡多から宇和海も含めて、協働のなかで観光ルートをつくるとか、観光商品の開発とか連携をしながら、広域観光を進めていく必要があると思っております。

もう一点は、優しい観光づくりということで、バリアフリー、高齢者に優しい観光地づくりが、大変必要だろうと思っております。これらを地元の業者さんと含めて、官と民が一緒になって取り組んで参りたいと思っております。

小林氏：

ありがとうございました。国立公園のメリットを皆さんでどういうふうに共有していくかという大きさや、これから的人口減少の社会になる中でどういったことが必要になるか5点についてご紹介いただきました。

神田さんにお聞きしたいと思います。神田さんが感じておられる国立公園の課題や問題点についてお考えをよろしくお願ひします。

神田氏：

ソーシャルメディアに来るにあたって、皆さんこれだけの多くの方が来てくださっているますが、どういうジャンルの方が来られていて、何を期待してこの会に来てくださっているのかが、そもそも大事だと思います。今からいくつか質問しますので、手を挙げていただいてよろしいでしょうか。まず土佐清水以外のところから来られた方、結構多いですね。逆に土佐清水の方、手を挙げてください。農林水産業に従事されている方は、どれくらいいらっしゃいますか。そしたら旅館民宿等の観光産業の関係の方、どれくらいいらっしゃいますか。学校関係の方、学校、大学。行政関係の方、手を挙げてください。何をいいたかったかというと、国立公園を活性化して再生していくというなかで、地元の人はどの程度来てもらいたいと思っているのか、ほんとに呼びたいと思っているのか、ですね。土佐清水に限らず、足摺宇和海国立公園にもっと人に来てもらいたいと思っているのか。じゃ、呼んだのはいいけれども、呼んでどうしますか、ということなんです。先ほどこのお話を、地域活性化というお話があるわけですが、それはよそから人に来てもらって、そこで何らかのお金を落としてもらうというのが目的ではないかと思うのですが、どういうふうにお金を落としてもらうかという仕組みが、あまり明確ではないと思うわけです。先ほどからお話出していますように、竜串というところは、ちょうど小学校の頃に、海中展望台ができたときに私も列に並んで、ものすごい喜んで見た覚えがあって、あのときの海の中は忘れられないわけですけれども。あの当時から西南豪雨を経て、非常にサンゴが元気がなくなってしまった。それが今、竜串自然復生事業をやっていく多くの皆さ

んの方々の協力によって、どんどん再生してきて、今現段階では昭和47年の頃を上回るくらいのサンゴが再生してきて、非常に元気がいい。海の中は戻っているわけです。けども、お客様はこない、昔のような観光バスが何十台も並んで、人の列があつて、展望台に入るのに何時間待ちという、世の中じゃないわけですね。じゃや、ものはあるのに何故人が来ないかというのはマッチングができない。つまり呼びたい人たちが、何をもって呼びたいと思っているのか。来た人は何をニーズとして考えているのか。そこをうまいこと合わさなければならぬ。私たちもいろんな方々も、様々な提案をしていきます。山ほど提案は出てくる。そういう協議会をもつわけです。どこでもそうなのですが、いろいろな案は出てくるけども、案が出ただけで、だいたい終わるんですね。結局何が足らぬかというと、やる人が居ない。その案をもって自分がやろう、やるという人がいないから、いくらいいい案があつても、話で終わってしまう。そういうことがありますので、結局呼びたいという人たち、そして地元の人たちも自慢にして、来てもらいたいというなかにあっては、その人たちに何を見せたらいいのか、そういうことをもう一回問い合わせ直すいい機会ではないかなと思っています。

私は今柏島で、こういうことをやっています。島が丸ごとミュージアムということで、柏島周辺の海や山のアクティビティなどさまざまな体験ができます。港の中で養殖体験をしたり、釣り体験であつたり、磯の生き物観察、クルージングでウミガメの観察をしたり、シュノーケリング、ダイビング、さまざまなことできるわけで、そういう素材はある。素材をやるために業者がどれだけいるかですね。

たとえばシュノーケリングをしましょうといつても、フィンとマスクとシュノーケルをつけて海に入ることは同じ、それをシュノーケリングといいますけれども、そこでどのように指導して、どう見せるかという見せ方も大事になってくるわけです。ここは人のガイド力という能力が試されます。ここを磨かないと、今全国各地、国立公園があつて、さまざまな海のきれいなところもありますから、お客様は目が肥えます。そんな目の肥えたお客様に対して、40年前の方法で同じようサービス提供しても、たぶん人は来てくれない。そこではやっぱり、人が人の魅力で人を呼び込むような仕組みが必要だと思っています。

これはクリアカヌーといったカヌーを使っています。底が透明なカヌーで、ただ漕ぐだけでなく、そこでいろんな説明をしたり、おもしろおかしくやっていくという一つのアクティビティです。

同じように海の生き物を観察するにしても、単に説明をして、これは何ですよ、これは何ですよというのを教えるだけではなくて、来た人たちに、学びというか気づき、これおもしろいと思わせるような、そういうガイドの技術が必要になってきます。

これはそういう自然なものだけでなく、今の観光客のニーズというのは、景観も楽しめて、体験もして、プラスおいしいもの食べて、プラスアルファ温泉にも入りたい、という話があると思うのですが、いった食というのは、海山川、非常に豊かなところがありますんで、いろんなところにいい食があるはずです。そういう人たちと連携していく、農林水産業の方と観光業者の方、いろんな人がリンクしていく、結びつくと。自分一人だけするのではなく、自分が何かプランをもついたら、いろんな人と手をつないで、一緒にやりましょう、一緒にやりましょう、そしてともに儲けていきましょう、という形で、マーケットを広げていく必要があると思います。

柏島というのは、夏は泊まるところがないくらい多くのダイバーが来



て、宿がないんですが、冬は北西の季節風が吹いて海が荒れて、全然人は来ませんし、ダイバーは海に潜れません。けれども、冬には冬の海の味覚があります。そういった夏は旅館・民宿は忙しいけれども、冬は閑古鳥が鳴いていますので、別のターゲットのお客さんを冬に呼び込むために、こういった郷土料理づくり体験を実際してもらうことによる冬場の旅館・民宿の活性化プランというものをやっています。ここで講師になるのは、旅館・民宿のおかみさん、もしくはご主人が指導をするということになります。



おいしい料理を食べる、プラスアルファで、自分たちもそこで教えてもらって、自分で作って食べるということが魅力で、一緒に食べようと、民宿・旅館のご主人とそこでお話をしながら。そうすると、普段は裏方で出てこない民宿・旅館のご主人やおかみさんが来てもらうことによって、その人の魅力がだんだん伝わっていく。そうするとその旅館・民宿でも、料理がおいしいからだけでなく、あのおんちゃんに会いたい、あのおばちゃんに会いたいということで、リピーターが増えてくる、別の層が獲得できる可能性があると思います。

そういった形で活性化策というのは、先ほどいいましたように、マッチングですよね、お客様のニーズと出したい方の考え方、マッチするかどうかということ。そこで柏島というのは、海中風景が非常にいいと、腕のいいガイドがどんどん増えてきたということで、全国各地からお客様が来るようになってきたと。人がどんどん来たから、新しい産業として柏島では、ダイビングというのがメッカになってきたわけですが、一方で、ただ来ればいいというわけではない、来たことによって、サンゴが傷ついたりとか、オーバーユースの問題も出てきたわけです。使い過ぎによって、環境が悪化するという問題です。そういったことを使う以上は、必ずそこにある自然環境が今どういう状況なのかということをチェックする、モニタリングというシステムが必要で、柏島でも12年前からやっておりますが、サンゴがどのように変化しているか、それがヒメシロレイシガイによる食害なのか、オニヒトデによるものなのか、ダイバーによる破損、ゴミの不法投棄、台風による影響なのか、そういうものを見極めるなかで、常に地域の環境をモニタリングしていくことが必要であると考えているわけです。そういったことで、課題と活性化ということについては、今お話をさせていただいたわけです。やはりいくら旗を振っても、ものは動かない。やはり、実際やるんだという人が、1人でも2人でも手を挙げてきたときに、そこに対して行政やさまざまな方が応援をして、新しいビジネスプランを作っていく。そしてそのビジネスプランが成功になってきたときには、オーバーユースに気をつけながら、長く使っていく仕組みを作っていくということが必要だろうと考えています。



小林氏：

パネリストの皆さん、どうもありがとうございます。ここでいいたんフロアの皆様より、ここまでパネルディスカッションにつきまして、ご質問やご意見をお聞きしたいと思います。

フロア：

神田さんに一つご質問をいたします。神田さんが柏島に来たときと比べて、柏島の人口は増えていますか。

神田氏 :

私が来たのが、今から 14 年前の平成 10 年です。そのときの柏島の人口が 630 人でした。今の柏島の人口は 500 人を少し切ってます。もちろん減ってきてるわけですね。人口比を見てみると、やはりお年寄りの方が非常に多い島で、自然減の減少が多い。一方で、ダイビングやさまざまな旅館や、あるいはマグロ養殖というのがやられていますが、そういった若い人の働く場が少しずつできていったことで、I ターン者や U ターン者が帰ってきて、その人たち比較的若いですから、子どもを産んで、今少しずつ柏島の子どもが増えてきています。私の子どもも 3 歳で、保育所で元気にやっているところです。ただ、圧倒的にお年寄りが多いので、毎年、2 月と 8 月、暑いときと寒いときは、パタパタっと亡くなって、しょっちゅう葬式に行かなきゃいけないです。しかし大月町内でいいますと、やっぱり一番活気があるのは柏島ではないかと思っています。もう一ついうと、柏島、もっと人が増えるためには、家がないんですね。空き家はいっぱいありますけれども、貸してもらえる空き家がない。仕事でこっちへ来てダイビングで務めている若い子、いっぱいいるんですけども、ほとんどが大月の中心部とか宿毛の方で生活していると。来たいというニーズがあるにもかかわらず、そこを受け止められるだけの仕組みがないばっかりに、増えるものが増え止まってしまっているというのはあります。この辺は行政も含めて、地域の問題として取り組んでいけば、もう少し減少率は下がっていくんじゃないかなと思います。

フロア :

私も以前潜っていって、自分でオニヒトデを駆除していたんですが、産卵時期ははっきり把握できてるんですか。

岩瀬氏 :

オニヒトデについては夏です。7 月、8 月、9 月くらい。結構長い。ヒメシロレイシガイダマシは秋から冬の始めくらいが産卵時期だと思います。

フロア :

実は愛南町で実際に駆除していますが、往々にして秋頃ですね。駆除の時期を早期にせんと、1 匹が 100 匹になる。できたら産卵前がいいんじゃないかと、前々から言っていたのですが、はっきり産卵時期が確認できてなかったので、だいたいそれくらいじゃないかというのは、推測できていたのですが、他の駆除しているところは、どんなもんでしょうかね。産卵時期の以後と以前との駆除の状態は。

西尾氏 :

私も専門家ではないので、詳しいことはわからないんですが、駆除というと、ダイビング業者がすることが多いようです。夏場というと、どうしても専門のガイディングですよね。お客様が来て海を見せるということが、中心になっておりますので、やはりお客様が居なくなる冬場を中心に、現在のところはやっていることがあります。

竹葉氏 :

私も、竜串の場合は、オニヒトデが主なんですけれども、正確に竜串で産んでいるかどうか、その確認が僕もはっきり知りません。というのは、沖縄で生まれた卵がこちらの方に流れてきて、ここで育っているというのもあると思いますし、それを思ったのは、さっきオニヒトデの駆除数で出した平成 16 年度に、2200 と急激に増えたときがあるんですね。水害の後 3 年目です。水害のときに、想像するに、山からの栄養分が海に流れ

込んで、小さいオニヒトデが育ちやすい状況ができた。それで3年目、駆除したオニヒトデ、計測するとだいたい30cm前後が一番多かったんです。だからちょうど合うんじゃないかと思うけど、岩瀬さんどうでしょうね。レイシガイの場合は、駆除をするときに貝を割って取りますが、死んだサンゴの裏を見るとだいたい卵がついています。僕が知る限りでは年中ですね。岩瀬さんと話したように、一番産む時期とかそういうのがあるのかもしれません、レイシガイに食われたサンゴを割って裏を見ると、だいたい卵がついています。だから年中産んでるんじゃないかと、僕は思っています。だから駆除に一番いい時期は、とくにないのかなと思っていますけど。

小林氏：

会場の皆さん、どうもありがとうございます。では、最後の議題に移りたいと思います。基調講演でもありましたように、これから国立公園の保護と利用を推進するためには、さまざまな主体が協力、協働する体制が必要だということがありました。足摺宇和海国立公園には、パネリストの皆さんに語っていただいたような素晴らしい魅力があります。そして課題や問題点があります。こういった魅力を維持、さらに向上して、課題に取り組んでいくためには、今以上に各主体がそれぞれ動くというよりも連携、協働していくことが必要になってくるのかなと感じております。

それでは、パネリストの皆さんに最後に問うていきたいと思います。これから足摺宇和海国立公園の保護と利用を推進して、国の宝、地域の宝、地域活性化を図って、国立公園とともに守ろう、ともに活かそう、そういったためには、具体的にはどういった連携や体制、仕組みが必要でしょうか。まずは田村さんに、そういう連携についてお考え方の方、伺いたいと思います。

田村氏：

先ほどから出でおりますように、連携というのがキーワードだと思います。今後どういうふうに発展させていけばいいのかというのは、皆さんで知恵を出し合いながら考えていただいたらといいと思いますが、今現在取り組んでいることを報告させていただきたいと思います。以前から南予から足摺にかけて四万十を含めて連携をしながら、いろんな旅行会社さんにPRをしてきましたが、ここ2、3年、とくに今まで以上に連携をとりながら、旅行会社さんにPRを進めています。去年、一昨年2年間、大阪の方に赴きまして、南予から、足摺、四万十のエリアの各施設の皆さんに集まつていただいて、旅行会社さんに向けてのPR、説明会を実施しております。

それと、徳島県になりますが、大歩危祖谷地区、これは日本の三大秘境の一つで、ここも秘境という名前で売っています。足摺岬に関しましても、先ほど申し上げましたように非常に遠い。東京からすると、時間距離で日本で最も遠い観光地というふうにいわれていますが、非常に遠いという場所を逆手にとりまして、海の秘境ということで銘打ちまして、海の秘境 VS 山の秘境ということで、大歩危地区と対決構図で去年から PR を進めています。

これは決して仲が悪くて喧嘩をしているわけではなくて、それぞれのテーマごとに、自分たちの売りたいところ、PRしたいところを強調していくわけです。絶景、あるいは自然、パワースポット、食とか、テーマごとに大歩危祖谷地区と足摺地区で自分たちの自慢のところを打ち出しながら、PRしていくということをやっています。基本的にソーシャルネットワークの最大手、フェイスブックを中心に投票していただいて、勝ち負けを決めてやっており、第1回目のちょうど去年の今頃やった分は、残念ながら負けてしまいました、その罰ゲームとして、今日もお越しいただいております杉村市長直々に同行していただきまして、高松駅前で相手チームのパンフレット配りをするとか、大歩危駅の清掃活動をとかいうことをやったりしました。今回、第2回目をやったのですが、今回は勝ちましたので、今度は向こうの市長



もしくは副市長に来ていただいて、今の案では、万次郎の銅像を掃除してもらおうかと思っていますが、調整中です。これは決して対立しているわけではなくて、そういうことを通して PR していこうということです。前回も負けはしたのですが、それが PR 活動になったということがあります。それで実際、大手の旅行会社さんがいくつか商品をつくってくれております。それと一般の方々も、最初は祖谷一泊、高知市内一泊の予定だったお客様がそれを見て、足摺に変更したというお客様もいらっしゃると聞いておりまして、少しづつ効果が出てきたのかなと感触を感じているところです。

それとエリア同士の連携というのも重要ですが、地元の業者といいますか、体験プログラムの施設さんとの連携も、さらに強めていかないといけないと思っています。先ほど申し上げましたように、景色を見て周遊する旅行ではなくて、プラス体験ということがキーワードになっておりますので、そういった地元には、ホエールウォッチングとかイルカウォッチングとか、あるいは、ジンベイスイム、ジンベイザメと一緒に泳ぐとか、あるいはダイビングだけでもいいんですが、そういった体験プログラムの業者さんとタイアップしながら、商品展開していくことが重要であろうと思っています。いずれにしても地域間の連携、あるいは異業種との連携が、今後重要になってくると思います。これは一次産業の方々も含めて、今、旅行では、先ほど神田さんもおっしゃったように、食というのもキーワードになっていますので、地産地消といいますか、地元で採れたものを食材に使った料理を言われますので、第一次産業の方々とも連携をとりながら、足摺宇和海地区を PR していきたいと思っております。



小林氏：

これから連携というのは、国立公園の中では、観光というもののだけでなく、異業種、一次産業とか、また他の地域と連携していくことが必要ですね。また、SNS の話もありましたけども、インターネットの普及で、そういったところでの PR も重要な要素だということを考えさせられました。ありがとうございます。続きまして、神田さんにもお考えをお願いしたいと思います。

神田氏：

先ほどもお話ししましたが、国立公園の保護と利用の促進の体制、連携というお話をさせていただこうと思います。先ほど少しこそびれたことで、新たな産業を立ち上げることにあっては、たとえば、竜串でいいますと、竜串自然再生事業というのがありますし、一度ゼロになった、あるいは全くサンゴなくなってしまった山も海も川も荒れてしまった状態が、ここ 10 数年で再生していくって、今非常にいい状況になっていると。これはゼロから、100 というかどうかわかりませんが、そこにいくまでのプロセスを、実は土佐清水はもっているわけです。これは他にない強みでもあります。泥をかぶってサンゴがなくなったからだめだと落胆するのではなくて、そこを逆手にとって、こういうところは他にないよ、だからここから学んでほしいということを一つのプログラムとする。たとえばそれは、地元の子どもたちの環境教育のプログラムとして定着させていくって、竜串の子どもたちだけでなく、土佐清水の子どもたちがみんな学習できるようなシステムをつくる。さらにいえば、そこでトレーニングをしていくなかでノウハウを培っていけば、次はそれを修学旅行のプランとして出すこともできる。これは他にない、ここだけの強みです。それを修学旅行からさらにいえば、今エコツーリズムというのが推進されているわけですが、そういうエコツーリズムに向けて、さらにステップアップしていくと。ということでここでしかで

きないことで勝負していくというのもありかなと思っています。

柏島というのは、非常に海の環境がいいということが、私たち研究者やさまざまなところから発信していく中で、最も魚の種類が多い、すごい海だということで全国雑誌からも賞賛を浴びまして、どんどんお客様、来出しました。

元々漁業の島だったところに、新たな観光産業としてダイビングという観光漁業スタイルが入ってきたわけです。しかしこれが出てきたときにマッチングしたことで、お客様は来たけれども、受け入れる側のガイドの力量、あるいはモラルが欠けていたところもあって、お客様に新しいもの、変わったもの見せなきやいけないということで、希少な生き物の取り合いをした。レベルがそこに達しないようなお客様も連れて行って、サンゴを壊してしまった。また、砂の上に立ってるウミウチワというところに、ピグミーシーホースという小指の爪くらいしかない魚が3匹おりますけれども、それをみんなで見に行くわけです。これで年間1万人から2万人のダイバーが来ました。けども、砂を巻き上げることによって、サンゴがダメージを受けて、あるいはいい写真を撮ろうと思って、ここの魚をつつきまくったことによって弱ってしまった、さまざまな要因があります。さらにいえば、元々漁業だった頃に、魚が今いるからといって潜っていくと、漁場とのバッティングもあって、そのトラブルも生じて問題が生じてきたわけです。

要するに、そこで地域の環境資源は1級のものがあったけれども、裏を返せば、エリアも小さいので、脆弱性というものもあるわけですね。人が大量に来て、キャパ以上のお客さんが入ってしまうと、環境がダメージを受けて再生しなくなる。そういうところでモラルというかルールが必要になってくる。さらに元々あった地場産業である漁業とダイビングがバッティングしたわけで、そこがごちゃごちゃしていると、全体としての雰囲気が悪い。ダイバーが潜りにきても、業者から白い目で見られて嫌な顔される。行ったら海はいいけれども、おかがちょっとね、という声もあったわけですが、そこで両者の関係を良くしようということで始めたのが、このアオリイカの人工産卵床をつくって、地元で取引されているアオリイカを増やす。それを漁師さんはほしい、捕るのは漁師さんですけれども、漁師さんがほしいイカをダイバーが協力して増やして、両者の関係を修復していく。さらにいえば、地元の子どもたちの環境教育のプログラムとしたことによって、ダイバーや漁師さん、学校、そして、これは水中に藻場代わりにスギやヒノキの間伐材の枝葉を使っているのですが、森と海のつながりがあるといわれているように、山で不要になった枝葉をもらってきて、それを藻場の代わりにして海に入れることで、イカの産卵床をつくってやろうという取り組みを始めたわけです。

それによって、これはダイバーが海に潜って産卵床を海底に設置するわけですが、どんどんイカが集まつくると。

アオリイカというのは、高値で取引されます。キロ2,000円とか2,500円で取引される非常においしいイカですけれども、このイカがどんどん集まつくると。

海の中に現れた人工の森、里山のようなものをつくることによって、



そこにイカの里をつくったわけです。イカが集まってきて、卵を産むわけです。そうすることによって、イカが増える。それによって、漁師さんとの仲も緩和されていくと。地元の子どもたちの環境教育にもなる、ということで成功モデルになっているわけです。さらにいえば、ダイビングと漁業者との関係が良くなつて、信頼関係ができてくると、自分たちが入れた産卵床をウォッチングするようなツアーをやっていいというような許可が出てきだして、さらに新しいビジネスチャンスが生まれたというわけです。

こういったことを、子どもたちや地元の漁師さん、ダイバーの方にも映像でもって見せることによって、成果が現れた。やはり成果が現れたことを見せないと、ただやっただけでは海のことですのでわからないので、映像で見せることによって効果を發揮したと。

先ほどのモデルですけれども、仲の悪かった漁業者とダイビング業者、つまり単に観光で人を呼び込むだけではなく、元々既存にあった漁業者とうまくやっていくことで、地域全体を活性化していくことにもつながりますし、子どもたちの環境教育にもつながるというわけです。

そういった活動がどんどん広がってきて、もう今年で13年になりますが、進めていく中で柏島だけではなくて、大月町の小学校や宿毛市の沖の島や鵜来島、去年は竜串でも「モイカクラブ」というのが立ち上がりまして、イカの産卵床を設置することができました。その材となるのは、大月の森林組合、宿毛市の森林組合、三原の森林組合と、いろんなところと連携することによって、関係が良くなりつつ、海から森、広域へも増やしていくこうという取り組みにつながっています。

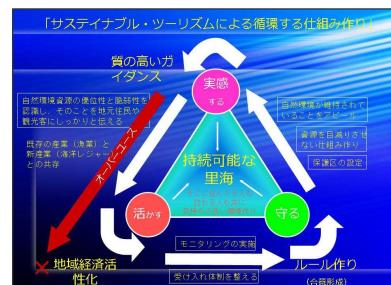
一方で多くのお客様が来ることによって、観光産業のお金は落ちたけれども、いつきのバブルのように人が来てしまうと、受け入れるキャパがない島では、当然だめになってしまふわけですね。その最たるもののが、駐車場がない島に、多くの釣り客、キャンプ客、海水浴客が来たことによって、多くの路上駐車があつたりとか、あふれてしまつて非常に混乱してしまつたと。増え続けるキャンプ客や海水浴客に対して、放棄されるゴミとか、違法駐車、風紀問題、夜間騒音、水の無駄遣い、さまざまな問題が生じてくるわけです。ですからだ人が来ればいいということではなくて、どういう人に来てもらって、どういうルールを守つてもらうかが必要である。つまり柏島というのは、日本1級の素晴らしい環境を有しているわけですけれども、柏島は非日常を提供するようなリゾート地ではなくて、島民の生活の場であると。先ほど、お話をありましたようにアジア型の国立公園、人口密度が高い、そこには野生生物だけでなく、人の営みもあるという、ごちやつとしたところで上手にやっていくためには、このようなさまざまなトラブルを上手に回避していくかなきやいけない。その中で訪れる人も住んでいる人も、ともに気持ちのいい島づくりをしていくことで、それをするためには島独自のローカルルールを周知徹底して皆に知つてもらうことを始めなきやいけない。それを今、柏島里海憲章というものを作つて、皆さんに知つてもらおうと取り組みをしているわけです。



受け入れ体制を整えるということと、島独自のローカルルールをつくることによって、それを情報として発信する。これまで全国各地で失敗してきたような消費型の観光地を目指すのではなく、持続可能な環境立島を、柏島としては目指していくべきじゃないかと。これは国立公園としても同じだと思います。非常に人気のある知床や小笠原といった観光客が多く訪れるところは、利用はどんどん進んでいるけれども、逆にいえば、それが消費されるだけであつては、自然がなくなってしまう。だから上手に回すための仕組みが、必要であるという

ことです。

今回私がいいたいのは、私たちのモデルは持続可能な里海というところにあるわけです。エコツーリズムと、いうのを推進するにあたって、よくいわれるのは質の高いガイダンスを、ガイドの質を上げるということと、ルールを作ることが必要不可欠であるとよくいわれていますが、私たちがやっている自然を実感する取り組み、自然を活かした暮らしづくりのお手伝い、そして自然と暮らしを守る、という3つの取り組みを続けていくことによって、実感する、つまり質の高いガイド、たとえばダイビングならダイビング、エコツアーならエコツアーの高いガイド力によって、お客様を集客すると。しかし集客するだけでどんどんいくと、儲かるだけ、どんどん走ってしまうとオーバーユースになってしまって、一時経済は活性化するけれども、そのうちだめになる。そうではなくて、上手に活かすというところから、右へベースランニングさせる、つまりそこではモニタリングすることによって、今現在の海中景観、自然景観、あるいは人の生活もそうですけれども、そういうことをモニタリングすることによって現状を把握する。そして呼ぶだけではなくて、受け入れるだけの体制を整えておく必要がある。ルールをつくるには合意形成という難しい問題があるわけですが、ルールを作ったなかでは、これを守る。守ることによって自然環境が維持されていることを逆にアピールして、資源を目減りさせない仕組みをつくり、あるいは保護区の設定という方法もあるかもしれません。そういうことで、また上の実感するというところに回ってもらう。ということで、一方通行の流れではなくて、上手に回っていくことが国立公園にあっても、保全できる里海にあっても、必要ではないかと考えているところです。こういうことでそこに住んでいる人たちが、やはりそこで住み続けていくことができるよう、長く使える仕組みをともに作っていく必要があるんじゃないかなと思っています。



小林氏：

どうもありがとうございました。

お時間も来ましたので、パネルディスカッションの締めに入りたいと思います。これまでのカッションで、さまざまな魅力や課題があるということはわかつていただけたかと思います。パネリストの皆様をはじめ、多くの方が試行錯誤を始め、地域の活性化を目指しております。日本の国立公園は、結局「人」なのかな、と思います。アメリカ型のように、国立公園が別の場所にあるよりは、日本の場合は生活圏とかなり重なっている部分がある。そういう環境の中で、国立公園を活かすも殺すもどうしていくかも、結局は人によって左右されていくのかなと思います。その中で、国立公園について、どんなメリットを見出していくか、そのためにはルールをどうするか、そういうことについて多くの方、いろんな関係者、幅広い方と一緒に考えて行動していくことが重要かと思います。これからもこの足摺宇和海国立公園の保護と利用を推進していくために、多くの方々と協力して一緒になって考えて行動して、より良い未来をつくっていきたいと思います。

以上で、パネルディスカッションを終わりにしたいと思います。パネリストの皆さん、会場の皆さん、ありがとうございました。